

あそ

11

2014



東京タワー

遠きミャンマー



南溟の虹はまへすぐ立つと知れ

佐藤喜孝

あそ

十一月

蟬

佐藤喜孝

東京

蚊遣香ひとり笑ひのテレビジョン

油蟬池は水輪をひろげをる

みんなん蟬こゑを忍んで暴れゐる

登らぬと決めたところ泥の蟬

日は天に憚然としたる通し鴨

夏草や倦まず弛まず捨て鏡

目かくしの指のすきまの曼珠沙華



『毛吹草』は江戸俳人の必読辞書であつたらしい。恋の座が不得手で困つてゐたところ同書に「誹諧戀之詞」といふ項を見つけた。書写してみる。

「夫婦 さゝやく 身をこかす かいな引 占筮 待女郎 落髪惜 前後見る 戀風 辻に立 肌にふるゝ つはりやみ 二世の契 ふりのよき 胸をやく 縁を結ぶ 貝桶渡す 身を嗜 姿見の鏡 戀やせ 目ませ 長枕 月の障 ひよくの中 みめの善悪 しんき 淵に身投 云名つけ 部屋住 けしやう 匂袋 戀やみ あひつ 肌帯 子をおろす 連理の中 情ふりらうさい 思ひきられぬ 中人 十五日 歸 口へに 匂の玉 れんほ やくそく もゝのこび 子もち臭 偕老同穴 うしろかみ引 くときこと 愛染祈よめ入 長かもし 爪へに 倂のぞく 袖引 肌の善悪 しり目づかひ おさななしみ 寝物語 小ゆひ切 むすふの神」まだまだ続くが今月はここまで。分らぬ詞は調べると面白いかも

☆

山莊慶子

埼玉

日暮どき別鴉の声高し

ウオーキング気負ひし背に秋うらら

父親の場所取りゲーム運動会

三輻の電車秋空横切れり

亡き人の思ひ出たぐる秋彼岸

飛散防止フィルムを貼る長き夜

物言へば首傾ぐ犬霧時雨

☆

吉弘恭子

東京

歩を共にするかここから蝸牛

神宮へ帰る鴉の夜さりかな

暮れ泥む秋空鴉の影動く

つまづきて石段駆けて蓮の水

せかせかと咽おりくる冷し酒

母のこゑ雑踏から消ゆ追うて汗

五欲からうつかり一欲なくす夏



生まれたばかりの孫が救急車で病院に運ばれてしまった。三ヶ月ぶりに帰宅出来た子は、病院で見っていた時よりとても元気であった。初節句は入院中だったので出来なかったが、来年は今年の分の思いを込めたいと心の中で思っている。あれから三ヶ月が経った。男の子らしい面構えになって来た。元気にわらっているのは、見ているも己がしても楽しい。いつまでもそんな状態でいれることを望んでやまない。

栗しぐれ

赤座典子

東京

半時を網戸で過ごす秋の蟬

朝日のアおしまひのうんずずごだま

二十世紀の両手に余る浅緑

女子会や意見の多き初さんま

無月とてワインで団子つまみをり

秋彼岸母に供へる栗しぐれ

決勝戦術無く終り九月尽

☆

井上石動

山梨

止まったよタマの尾つぽへ赤とんぼ

髭先にまでゐのこづち猫戻る

ガイドさん松虫草を見てゐたる

ほろほろと七島八島草の花

午後の日のお座布に乘れり草の絮

漁に出てゆく舟や秋夕焼

嫁ぐ子のやさしくなりぬ実紫

島が好きなので今回は島根県の隠岐へ行ってきた。島の数は全部で百八十以上もあるがその内大きい有人島四島だけを四日間で巡るツアーであった。歴史として天皇はじめ多くの貴族等が流されたことで知られており、その時代からの神社や相撲牛突きなどの行事も立派に残されていた。本土からの交通手段は様々あっても、島自体はおっとりとしていて、人々もゆったりと暮らしているように思えた。

海蝕作用による光景は本当に不思議で豊富な魚介類とともに島の素晴らしさを十分に味わうことができた。四島の中で一番小さい知夫里島は人よりも牛と狸のほうが数が多いそうである。狸には会えなかったが、山全体に放牧されている

牛は近付いても逃げないで悠々としていた。この島だけに滞在してみたいと思った。

わせの香や分入右は…

快晴の9月初、新潟・糸魚川の翡翠・縄文遺跡見学会に参加。私の「主題」は、自由昼食の場たる「市振」海岸。そう、あの芭蕉さんに「一家に遊女もねたり萩と月」を作らせた地。で、その市振の海岸で昼飯を食いながら考えた。

この市振を過ぎ、高岡に入り、そして詠んだ句が「わせの香や分入右は有機海」。しかし、よりによって何で「右は」などという「説明語」を入れ込んだのだらう…と。ナマ過ぎる言葉ではないだらうか…と。「右」に、何らかの意味合いがあればまだしも、単なる「方角説明」で終わったのでは…と。

尤も「分入先は 分入後は」的語法も、多々俳人は詠んでいるので、そんなに不思議がないのかも知れないが、私にはどうも違和感がつきまとう。よりによって、あの芭蕉さんが 何故…と。

あをの連衆のみなさんは、どうお思いでしょうか？

祝 日

大日向幸江

埼玉

祝日の風にこぼれし萩の花

白杖の人にゆづりぬ秋日差

半時を歩き無月を見て帰る

取らずおく上着に付いた草の実を

葉の裏に秋明菊の色違ひ

二枚目の落武者の居る菊人形

カーペンターズの声に乗り来る赤蜻蛉

☆

齊藤 裕子

東京

孫と喰ふ笑顔はじけるかき氷

サボテンの開花に出会ふ闇夜かな

雲払ひ上りきつたる今日の月

走り蕎麦通のふりして十割を

寝付かれぬ無音の闇夜秋の宿

濡れそぼつ石塔のうへ秋茜

蚯蚓鳴く日光の宿寝付かれず



散歩でよく通る道沿いに、他の店に卸す為の多肉植物や観葉植物を育てている園芸店がある。九月のある日、外に置いてある一メートル位の桂サボテンに蕾らしき大きな芽が三個付いているのに気がついた。主人と見入っていると、中で作業していた若い女性が出てきて、後一週間位で咲くんじゃないかと言う。夜の十一時から十二時位に満開になり、翌朝には萎んでしまっらしい。それから四日目の昼間、通りがかりに見た主人が、一個がずいぶん膨らんで咲きそうだと言う。慌てて私も見に行つた。今日か明日がチャンスだと思つた。その夜、十一時前まで寝ずに頑張つて、主人と懐中電灯を持って見に行つた。予感的中！真っ白な直径十五センチ程の花が満開になっていた。夜中に怪しまれそうな人になりながら、懐中電灯の明かりに照らされる純白の花に見入つた。三つの蕾は、一日一つずつ順序良く続けて咲いた。二つ目は雨で諦めたが、三つ目は気になり、前より早めの十時半に見に行つた。美事に咲いていた。月下美人の花に似て居るが香りはなかった。デジカメに納めて帰り、幸せな気分ですみました。

日比谷公園盆踊

篠田

純子

東京

かはほり飛ぶ日比谷公園盆踊

カバン掛けサラリーマンのをどりをり

懸命にしかし適當盆踊

櫓の灯ぶつかり飛べる秋の蝉

外国人のしなよき河内音頭かな

をどりの夜白きかまきり歩みをり

芝生の上転がつてゐる浴衣の児

八月二十二日に日比谷公園で盆踊りが行われた。仕事帰りに寄ってみるとかなりの人出だ。芝生広場も開放され、座って焼鳥をつまみにビールを飲む。刈りたての芝はいい匂いがして、蜻蛉も沢山居て涼んでいる様だ。やがて盆踊が始まると、浴衣を着た人、カバンを肩から下げたサラリーマン、外国人の男女が、噴水の周りで東京音頭を踊り始めた。と思つたら一寸歌詞が違っている。東京音頭の原曲の、丸之内音頭とのこと。歌詞入りの手拭いを購入すると西条八十、中山晋平の作詞作曲とある。

ハア―大手うれしく顔三宅坂ヨイヨイほんにお前はほんにお前は数寄屋橋ヤットナそれヨイヨイヨイヨイヨイ……
櫓で民謡歌手も唄い始め、賑やかな夜を体験した。

近 道

定梶じよう

石川

跡継ぎのない禅寺の秋ともし

くらがりに牛の反芻十六夜

斧掲ぐ杞憂の天へいぼむしり

案山子今あけつぴろげの空が不安

忽ちに華やぐ燈火桃置けば

必勝のはちまき芋虫がしたり

バス停へ近道葡萄棚くぐる

かつて句会に、〈破れ案山子天上天衣無縫なり〉を投句したことがある。異口同音に

石酸玉天衣無縫のヒポクリットがある、ということだった。

心中ひそかに、草田男の専売ではあるまいし、と思つてのことばの使用だった。

ところが、ホトトギス同人の私の兄がこの句を知らなかった。大凡ホトトギス系の人たちは、他の結社の俳句を読むことあたかも禁止されているごとく読まない。知らない。だから理解できない。鑑賞力がない。ホトトギスのことを取り上げるたびに雑言になるのは私自身ほとほと疲れるのだが、周辺にそんな俳人はいないのだ。

九月

須賀敏子

埼玉

雨が行く夏の終りを告げて行く

山霧を含み蜘蛛の囀点々と

思草すつくと立ちて横を向く

馬鈴薯に北海道の土の色

白ゴーヤ葉陰にありて艶の良し

新潟の人は茸を見分けたり

初めてのゴツホひまはり七才の秋

坂

田中藤穂

東京

二度休む残暑の坂の長きこと

木の幹にもたれて遠き夕かなかな

望の月泰山木を離れゆく

お喋りの止まらぬ五人曼珠沙華

庫裡裏の絶えぬ川音葛の花

人恋ひの秋電話料かさみけり

田端駅刈られし葛の山積み



お彼岸が来ると約束のように赤い彼岸花が咲き、約束のように真黒の鳳蝶が訪れてその花にまつわって離れない。細かな水引草には小さな蛭蝶や小さな黄蝶が来ては去る。

今年は植木鉢の一重の酔芙蓉に蕾があるのでせつせと水をやっている。

スコットランドの住民投票は反独立派が勝ってイギリスの分裂は回避されたが、なんだか世界中がグラグラ揺れている感じがだ。日本人でイスラム国に捕らえられている人は無いのだろうか。国技館の遠藤は賞金ばかりかかって負け続け。鰻や鯨はどうなるのか。それより私は連句の一句を何とかクリアしなければ。

何だか私が空中分解してしまいう。

秋 冷

長崎桂子

三重

名月に顔顔声音浮び消ゆ

下校の児ひそひそ話す曼珠沙華

はなやかさ昼間ひととき曼珠沙華

枝切れれば残るかなぶんぶつかり来

かなぶんの秋灯恋し窓たたく

せせらぎの音も秋冷となりぬたり

秋冷や田畑乾びる黄金色

木 苺

森

理 和

東京

土手畦に路辺に赤あり天高し

紅に木苺熟るる高尾山

芒の穂庭を横切る逸れ猿

後輩の墓に詣でる秋の風

下田行き電車見送り花薄

背負ふ籠下ろし葉生姜疎抜き葉

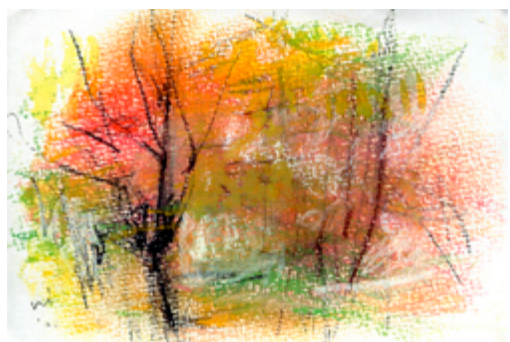
電車待つ足元へ猫葉鶏頭

庭の紫露草は今年は何故かよく育って、葉は去年の倍ほどもあり花は一段と濃い紫色です。

七月と八月はよく吹いてよく降って、極端に少なかった日照時間だったのに、草花には何にも影響はなかったようです。

それにしても此の変化の激しい月日を青々と元気に生い茂る草に、あやかりたいと思います。

そして又又九月十日の夜半から十一日晩にかけての雷雨は、凄まじくその雷鳴に、伊勢湾台風前日の轟音が蘇って来ました。今回は列島全体に起こっていて、どうか穏やかな気圧配置に戻って下さい。とお願ひし、お祈りする事しか出来ません。被害が少なくて済みます様にして下さる。



蝶はバラ科そしてわたしは裏星科 佐藤喜孝

入道雲等間隔にヘリコプター 森 理和

行水や手の中にある蒙古斑 吉弘恭子

くつきりと月中天に止まれり 赤座典子

少年の経いさぎよし秋遍路 井上石動

街中に鷗飛び交ふ秋出水 大日向幸江

手にとつて迷ふてをりぬ鰻の日 斉藤裕子

あにおとと草虱付けよく笑ふ 篠田純子

路地間違へたらしいサングラスを外す 定梶じょう

ロボットの行進夏の甲子園 須賀敏子

前方後円墳と空蟬闇に入る 田中藤穂

水盤に八月の葉を浮かべけり 長崎桂子

喜孝 抄



鐘の音の朝の蓮池わたりきる

佐藤 喜孝

鐘は寛永寺、蓮池は不忍池と思った。幾つかの鐘の合間。前の鐘が対岸に達するや次の鐘が鳴る…と作者は感じとった。池の広さも鑑賞者に伝わる。

当然のことだが池の上は建物が無いので、ぼつかりと空間が在る。蓮の青々と繁った葉の上の、湿った空気の中を、音叉のように鐘の音が伝わって行く。江戸時代と変わらない空間と時間を、味わっている作者が見える。(純子)

入道雲等間隔にヘリコプター

森 理和

ヘリコプターが等間隔に空を飛んでゐる。入道雲が湧上がる炎暑の空にである。表現はここ

行水や手の中にある蒙古斑

吉弘 恭子

で止つてゐる。等間隔に飛ぶヘリといへば訓練された編隊である。年代によっては戦争のイメージが浮ぶかも知れない。若い人の中には格好いなあと思ふかも知れぬ。わたしは前者の組。精神が病んでゐるのかも知れない。(喜孝)

母親であらうか、お祖母ちゃんだらうか。赤ちゃんに行水を使つてゐる。幸せそのもの時間である。蒙古斑も子供により濃さや範囲がさまざま。なぜあるのか、そして消えていくのが不思議である。行水を今は見かけぬつかしいものになった。大人も男女を問はずに使つてゐた時代があつた。昔日を思ひ起しての句であらう。(喜孝)

くつきりと月中天に止まれり

赤座 典子

くつきりいふか、すつきりといふか簡潔な表現である。しかし誠に印象鮮明一点の曇りもない句である。月は低きから高きへのぼり左から右へと大空をわたつてゆく。いつも動いていないやうにして秘かに動いてゐる。東亜未さんの蓼科の別荘で落葉松の梢を渡つていく月を眺めてゐた。目を逸らすともう右の木に来てゐる。掲句はさういふ理屈を忘れたかのやうに月が止まれりと決めつける。見事なものである。一片の雲影も認められぬ大空に掛る月を表現できた。

この句、一年前に既発表を間違へて投稿したといふ。わたしもその時は典子さんの違ふ句をとりあげてゐた。(喜孝)

少年の経いさぎよし秋遍路

井上 石動

遍路はなぜ春の季語なのだらう。「巡礼して廻る遍路の姿が多くなります。そこで「遍路」が春の季語となりました。有馬朗人「夏冬は氣候が過酷で巡礼の人が少ないので季語にならないのか。夏冬の比し秋は春ほどでないので「秋遍路」と春に一步譲つた格好になつたやうだ。多数決の原理が働いてゐる。巡礼のほとんどは高齢者と聞く。しかし若い人がゐてもをかしくはない。誦し慣れた年配の方の経と少年の経は違ひ元気がある。経を読上げ次の巡礼地へ足早に立去る少年を活写してゐる。(喜孝)

薑を良く食べ体調整へり

大日向 幸江

薑は「漢方では生姜しょうきょうといひ、発汗・健胃薬とする。」とある。確かに生姜を食べると身体が

ほかほかしてくる。薑をはじめ自然薯・セロリなど季節の野菜を作者は好んで食してをられるやうだ。肉類と違ひ何となく植物は身体がきれいになる気がするものだ。へ街中に鷗飛び交ふ秋出水へも普段見かけぬ鷗を以て洪水にあつた街の様子を描いて興味を持った。(喜孝)

手にとつて迷ふてをりぬ鰻の日

齊藤 裕子

俳諧は笑ひを基底としてゐる。

土用の丑の日に鰻を食べる習慣がある。うなぎ屋に入りお品書を見る。松にするか梅にするか財布と相談して悩んで決める。ところが裕子さんは手にとつてゐる。このことが分ると「笑ひ」の種が分る。裕子さんを庶民と決めてよいか分らぬが丑の日を鰻の日といひ変えた辺りにも庶民的である。裕子さんはやはり庶民かも知れない。(喜孝)

あにおとと草虱付けよく笑ふ

篠田 純子

子供の句には負ける。自己を回想した句より掲句のやうに子供や孫の句を読むと顔が緩む。どうも私も老いた。純子さんの句にも子供の笑顔につられる読者がある。草むらの中で戯れてゐる兄弟を見守るやさしい目がある。一般論だが、子供の天真爛漫さを描いた句は、読者はよいが詠者は溺れぬことが肝要。(喜孝)

路地間違へたらしいサングラスを外す

定梶 じょう

訪問先への路を間違へたらしい。よくあることだ。ここでじょうさんは、サングラスを外した。サングラスに慣れた者ならさうはしないだらう。あたりを良く見るためにサングラスを外したのかも知れぬが、さうばかりではない。ちよつとした仕草に作者の戸惑つた心理が描か

れてゐる。ここにも笑ひの種があるといへる。へ西日さす珞瑯引の洗面器へのなつかしい光景に惹かれた。(喜孝)

ロボットの行進夏の甲子園

須賀 敏子

最近、高校野球中継を見たことはないがまだ一律に丸刈りなのであらうか。歩き方も兵隊さんの行進を思ひ出す。敏子さんもさういふ思ひを含めて「ロボット」のやうだと比喩した。(喜孝)

前方後円墳と空蟬間に入る

田中 藤穂

関西に在る古墳は、宮内庁が管理しているが、天皇の陵墓である所以と思う。ところが私の回りに在る古墳は、公園になっている。大方葬られているのは、古代のその土地の豪族であらう。円墳の頂上から暮れ始め、やがてすっぱり闇の

中に。誰が、何時、埋葬されたのか…。魂はまだ其処に在るのだらうか。形骸化した古墳と空蟬が、闇に葬られていくような印象にロマンを感じた。(純子)

八月の繕ふ針はのろまです

長崎 桂子

実感のある句と思ひました。何日かかけて毎回少しずつでも、暑さにめげながらも頑張れ、頑張れと針に声を掛け続けているうち繕い物は出来上がる。汗の中、達成感の笑顔の作者が見えるようです。(純子)



一枚の写真

田中藤穂

いつも純子さんがくださる『銀座百点』の八月号の中の写真が何だか見覚えのある場所だと思ったら、日暮里の谷中銀座へ降りる夕焼け段だ。左手に大きく花寿司の看板があり、此処で小学校を卒業してから三十何年振りの同期会をしたのを思い出した。

日暮里も空襲で随分焼けてしまったから三組あった小学校の友達もみな散りくばらくばらになり、長い事逢う機会もなかったのだ。富士見坂の下の南泉寺のお友達がずっと同じ場所に住んでいらして、子供さん達も同じ第一日暮里小学校へ行っていた関係

で、同級生の住所を探し出してくださった。集まったものの仲々誰だかわからなくて可笑しかった。昔房々だった先生の頭髮もすっかり無くなっていたし……。

夕焼けだんだんや谷中銀座が出来たのは戦後だけれど、この辺は小学校の仲間は皆周知の場所だ。写真に見える大島酒店も知っている。あれから毎年、同級会は何回か続いたが、中心になっていた気象庁長官の内田さんが急死なさり、内田さんと仲好しで男子の方のまとめ役だった青木さんも続いて亡くなり、そのお葬式を最後に集まることもなくなった。

何だか一枚の写真がいろんな事いろんな人を思い出させてくれた。この段段は、父も母も私も、姉や二人の兄、弟も行き来したところだ。この写真は、花寿司の電話番号の頭に3がないのを見ると大分古そうだ。ここに写っている二人の子供も今はもう大人かもしれない。

終

自詠自読

コスモスの二本を剪つて親の墓 石 動

実家から車で20分ほどの処に父の墓は在った。父の実家の旦那寺。周りには父の縁者の墓が在る。その後母が亡くなったとき、この寺のお上人さんと跡取りたる兄との間に齟齬が生じた。兄曰く「あの坊主には心がない。先代様とはえらい違い」とのこと。で、寺を姉（兄の嫁さん）の実家の旦那寺に替え、母を合葬した。兄曰く「今度のお上人さんには心がある」。

どういう理由か自分でも解らないが「墓参り」はほとんどしない。が、社会人となって以来、朝ごとに親の位牌と神棚へ、お茶や時に珈琲を捧げているので、墓参りを毎日しているようなものだ…の気持ちもある。

そんな或る秋彼岸、久しぶりに墓参をした。行く道にコスモスの繚乱。その手折ったコスモスを墓前に供えた。父サン母サン綺麗に咲いていたよ。店で買うより心が籠っているこれで喜んでね…。と。形より心…と常々思っている。両親も「しようがない末子だが、まあいいか」と言ってくれると勝手に判断している。

一家での墓参はしないが、わが豚児たちへの悪影響はないと確信している。朝ごとの献茶は、仏さんへは豚児たち、神さんへは私、としていたので。少なくとも余所へ出るまでは、豚児たちも毎朝「ナムナム」とやっていた。ニキビ面連中の「ナムナム」姿は実に好感。「合掌する心」だけは愚息たちへ植えつけられたので、佳し…としている、そんな父親としての私。

蕎麦を刈る天に大きな影うごき じょう

もう何十年前も前のことです。当時投句していた俳誌の合評会に次記の拙句がとり上げられました。へ亀鳴くや違和を感じてをりぬべし〜随分煩瑣な句ですから説明言いわけが必要です。鳴くはずのない亀の鳴くことに亀自身きつと違和感を感じているに違いない、という内容なので、本当に煩瑣煩雑な句なのですが、ともかく合評の場にとり上げられた。おおよそ否定的に評価するためにあるのが合評ですから恐れながら読みすすんだところ、「違和感を感じる、は違和感の語を二つに割った措辞だ」とか「違和感を感じる、に違和感がある」などと評してある。たとえば、「清潔」という言葉があつて、「清潔感」などと遣いますが、「清潔を感じる」とあれば真つとうな遣いかたではない。たいてい「清潔さを感じる」とつかう筈です。「さ」は、形容動詞などの語幹に付いて名詞をつくる、と辞書に説明してある通り、「清潔だ」といえば形容動詞。「清潔」だけでは純粹な名刺として遣いづらい。一方「違和」は、「違和さ」

ろが進歩といえ言える。

ガリ版は月の光を刻む音

喜孝

わたしのはじめて入った俳誌は『みづおと』といふ。半紙を二つ折りにした袋綴。刺繍糸で二力所を結んだ大和綴といふのだらうか。題字・号数と色違いの木版刷。書棚から抜いてきた一冊は昭和四十年十一月発行とある。表紙を開くと木版で文楽人形が現れる。堀内一郎兄がわたしのへ兵器商笑ひのごとき炎揺れ〜に対して「個の確率が先決のようだ」と叱責してくれてみた。この句を含め多くの句を全く失念してゐることに愕然。句はごとくではなくごとくであらう。汗顔。

椰揄白き蝶獸園に秋が来て

堀内一郎

木犀の今日このごろの鼻美し

秋すだれ風に揺るごと苔樹氏来る

佐藤喜孝

とは違わないようにその言葉だけで名詞として立っている。したがって「違和を感じる」「違和を覚える」などとつかう。しかしです。収録語数の少ない辞書数冊にあたつたら、「違和感」があつて「違和」がない。そんな辞書は、今現在もつとも普通につかわれる語彙を優先して載せますから、「違和」なる名詞は現在あまり使用されないもの、になりつつあるのでしよう。

そして句の内容に一切触れることのない合評でしたから、わかってくれたのかな、と思つたりしたのです。

数十年経つて読み返してみても、この句のまじいところがよく分かる。抽象に偏りながら、抽象句になりきっていない。といって現実を踏まえたところもない。へ亀く亀は違和を感じてをりぬべし〜とすればまだしもわかり易かつたかもしれない。

掲句「蕎麦を刈る」ははるか後年の作ですが、中七以下の抽象を上五の事実でおさえて、そのとこ

ありつたけの都会の空が夕焼す

といふ句を発表してゐた。因みに苔樹氏とは主宰の武井石艸画伯と同じく日本画家で、わたしを俳句といふ穴の中に放り込んだ張本人である。

散文と作品の文字の大きさも違へ見事なものである。木版は主宰の武井石艸画伯、製本は主宰の家族ガリ版はプロの佐々木元三氏といふ布陣。この方々が毎月々々々と俳誌を発行続けた。もの凄いエネルギーである。俳句文学館に全冊寄贈されてゐるのでいつでも昔のわたしに会いに行くことが出来る。

と書いてゐてふと思つた。わたしと吉弘恭子で作つてゐる(内容ではありません)『あを』と似てゐるなどと思つた。時代が違いガリ版がパソコンとプリンターに変わり版画は不得手なので写真で誤魔化してゐるが、『みづおと』時代と何ら変はない。

製本を手伝はされたであらう石艸先生のご息女から頂いた暑中見舞、返事をも思つてゐる内に秋も深

まっってしまった。余生にほど遠い忙しい毎日、この暑中見舞のはがきを読返しながらきのふのこのやうに昔を振り返ってゐる秋の夜である。

駒下駄の箱に冬日を入れてをく 恭子

東京から疎開した福島の新潟の三春からまたまた新潟に引越した。その頃はまだ戦争の傷跡がそこいら中に残っていた。祖父のあとを継ぐことになった（どうして自分が選んだ職業を捨てて父親の後を継いだのか）とうとう聞かずじまいになってしまった。

新潟の戦後は結構楽しかった。戦後の話はすぐ食べ物のことになってしまいが、今では東京でも有名になった「加島屋」でイクラや筋子鯨などいくらでも売っていた。店を構えたのは、花柳界のそばであった。芸者さんや置屋の女将さんなどが草履下駄など高い物を買ってくださったようだ。父は職人で毎日下駄を作っていた。お店は母が守っていた。

も近くもつとも遠い場所この場所。

しなやかな雨の吾が町沈丁花 石動

どんな花が好きか……と聞かれたら、それはいっぱいあるが、春は沈丁花、夏は真っ赤なダリア、秋は松虫草、冬は……。吾が団地は、昔の桑畑を造成した地に在るが駅からは昇り。我が団地ばかりでなく、町全体がアップダウンの激しい地。（ある日、停の自転車漕いで身に沁みた。）四面に山々、見下ろせば桂川（相模川）。

冬には、オリオンが、ひとつひとつ出現するような山国の中の山の町。

そんな町ではあるが、しなやかに、しめやかに、春の雨は降ってくれる。沈丁が咲き、しなやかな雨が降ってくると、そろそろ燕がやって来る頃となる。

♪降りしきる雨の吐息にィ〜〜〜〜。

職人の父が作ってくれた下駄を履いていた。余所行きの下駄は大切にしまっておいた。普段は雑木の下駄であったが、余所行きは、桐の柾目の通ったものだった。お正月には新しい下駄を下ろした。お正月だけでは履ききれないので大事にしまっておくが、どうしても気になり箱に閉じ込めておけなくなる。そんな昔のことが、下駄を履いた時にふと思いついた。今でも三月すぎると素足で下駄を履き出す。今年履きつぶしてしまった。来年はどうしようかな？

犬ふぐり水道会社の鉄条網 幸江

貯水場はいつも静かだった。鉄条網で守られたその中では、四季折々の名も知らない花達が咲き雀や四季の小鳥の聖地だった。トゲトゲしい一本の鉄条網だけが人間界を遮っていた。ポツカリと綿雲が流れ水面に漂う説明のつかない不思議な時間、もつと

雨の日は、なおさら沈丁の香が強くなる。

古人は「風の音」に秋を知るらしいが、私は沈丁の香に春を知る。

狐川辛夷の中を流れつゝ、 石動

芋の露連山影を正しうす

ご存じ我が甲斐の蛇笏の句。小学校のとき、この句と出会う。芋の葉っぱに乗る露を通して、甲府盆地の西に連なる白根三山（北岳、間ノ岳、農鳥岳）を見た時の景……と幼心に理解した。ちなみに「奥白根かの世の雪を輝かす 普羅」の奥白根がこの山々。俳句に関わるようになってから、配合の句だという意見も識ったがこの幼心に理解した解釈を、私はいまだ固持している。

そして龍太。私が俳句に親しみ始めたころ、龍太はすでに一線を引退していた。龍太がまだ「雲母」

の主幸で活躍していたら、私は会員になっていた筈。私の兄の①友人に山廬（蛇笏龍太の家）補修の建築家がいた。②同僚に雲母同人がいた。③嫁さんの出が境川村（蛇笏龍太の生地）など、龍太とつながることが出来る微かな縁は有ったのに、一度も山廬訪問をしていなかった。

そして遂に山廬を訪れる機会を得た。

ああ、此処で、この筆類で、蛇笏龍太親子の句が生まれたのだ、とドキドキした。当日は龍太のご子息ご夫妻もいらっしやり、龍太の日常の話も聞けた。ご自由に内外を散策くださいの言葉に甘えて、諸所を探訪。竹箒も竹箕も架かっていた。これで龍太が掃除をしていたのだとドキドキ。裏庭に廻ると小さな川が流れていた。これが「狐川」。ちょうど辛夷も咲いていた。辛夷は龍太の葬儀で祭壇全面を飾った花。蕾であったのが、葬儀が始まると三つ開いたと狩行さんが何かで語っていた。見るもの、聞くもの、触るもの、すべてに蛇笏龍太親子の句の背

景が現れる山廬。

この句は、蛇笏・龍太へのオマージュのつもり。

ゴムホース溢れ出る水チューリップ 幸江

春咲く花の中でチューリップが好きだ。若い頃はチューリップなんて子供っぽいと目にも懸けなかった。その頃まだ聞きなれなかった病気で入院をした。季節は冬から春となり、退院をした。二ヶ月程の入院を終え、帰った家の庭は荒れていた。私の心もこの庭と同じように荒れ果てていた。

退院したものの、外に出る気もせずベットから外を見ていた。庭を猫が通り過ぎ、やがて戻って来ると前足でふつくらと土を掘り始めた。手の先に緑の物を付けている。その先に丸い球を引っ張り出した。球根だ。去年の秋、私が植えたチューリップだ。私は何故か外に出よう、球根を猫から助けようと思いが高まった。表は「ふんわり」と暖かい。大きく深

呼吸をした。猫は逃出した。球根は咲くにはまだ早い。土の中に戻した。その日から私の気分が変わり庭の手入を始めた。ゴムホースの先から水が溢れ力強く咲いた。

チューリップを潤している。

藤棚にスカイツリーの裾切られ 恭子

疎開して福島新潟と渡り歩き、東京に帰ってきてから今年で五十八年経ってしまった。経ってしまったと言うとなんだか意味深になってしまいが、毎日が長かったが過ぎてみると早かったように感じている昨今です。いつの間にか俳句に足を突っ込み、今ではどっぷりはまっている次第。先日東京タワーに

吟行した。六十年近く東京にしていることになるが、東京タワーができたのはいつ頃なのか。とんとおもしろくない。あまり興味が無いのかもしれない。と言ふ訳でタワーに登るのは初めて。高いところはあま

り好きではないが、外を見なければ揺れるでもなし地上と同じの快適な場所であった。上から見ると地上で見る景色の方が作句ごごろをくすぐった。目の前にあつた藤棚はもう花が終った葉だけが生きいきと棚を這っていた。藤棚があるとつい目がいってしまうのは何時ものことだったが、同じ目の位置にスカイツリーがあつた。残念ながら全景ではなかったが、ムサシの高さを楽しんだ。スカイツリーと言えば中野の我が家の屋上からお天気だとよく見える。今まで思っていた方角とだいぶ違う。方向音痴もなかなかのものだ。

善玉も悪玉も飛べしやばん玉 じょう

以前吟行会で、ある漁港とその周辺をあるいたことがありました。

私のメモ帳は日付けが書き入れてありませんので季は不明ですが、石鹼玉の句が書き止められている

ので春だったのでしょうか。その港での囁目なのです。
いま思い返してみると、十数噸の大きからず小ざ
からずの船の、機関室に父親（らしき人）がもぐり
こんでいて、船尾には女の子がしゃぼん玉を吹いて
いたのです。

吟行でこんな風景を見逃すてはありません。

岸へ向き船の子石鱈玉を吹く

哲夫

海にしか吹けず船上のしゃぼん玉

じょう

入点数は書いてありませんが、講評はしつかりメ
モしてあり、艦に坐った女の子が頻りに岸壁に向
かってしゃぼん玉を吹いていたわけですから、写生
派は哲夫さんの句を選び、私の句には虚がある、と。
「うそ」ではない、「虚」です。ですから、拙句を貶
めているわけではない。虚もまた俳句に必要である
ことを知っている人達です。それでも、事実ほど強
いものはないと信じて已まぬ方々ですから、岸壁す

私の住まいの北側と西側は隣家の駐車場です。西
側の駐車場は以前は田圃でそれを埋め立てて、駐車
場として今は使用しているのです。コンクリートで
固めてないので雑草が生えていて、ちよつとした広
場です。

この句は平成二十二年の作で、夕方になると鳴き
声はよく聞こえ、特に明日は雨らしい夕暮は鳴き立
てていました。六月頃より鳴声は聞こえてくるので、
ああそう言えば去年も鳴いていたなと思う。翌年に
鳴声は聞くと、無事で冬眠から覚めたのだなと思ひ、
懐かしく嬉しい気持がしました。

けれど去年も今年も鳴声を聞いていませんと言ひ
ますのも隣家は草むしりをしなくて二年前から除草
剤を使用するので、赤茶けた草の広場と変わってし
まいました。ともあれ寂しい気持です。

教卓や牛乳瓶に額の花

じょう

ぐに停泊しているにかかわらず、わたなかにあるよ
うな拙句の表現は、やはり意に染まぬわけです。無
論私の句が優れている、なぞと言っているのではあ
りませんし、私の句にわざとがましい所がある。よ
ほどの瑕疵がない限り句の優劣はつけようがないの
が本当です。ただ、これからの方々は席題、兼題を
一切なさらない。というより認めない。眼前にある
ものだけが真実で、俳句は真実でなければならぬ、
というわけです。そんな方々もみんな亡くなられて、
結社誌も廃刊。その同人だった姉も、九十歳を迎
えて、今は京都の息子のもとで余生を送っている。
「真実」結構、「虚」もまた結構、と思つて今後も
作句に携つて行こうと。

そういえば、現役当時に姉に連句のことを話した
ことがありましたが、全く通じなかつたことでした。

夕風に暮鳴立てて恙無し

桂子

私の同級生達が卒業時、学校はまだ村立を名のつ
てました。小学校が四つ中学校が一枚あつて、村の
人口七千はあつたはずです。

その後数年を経て、一つの町と六つの村が合併。
一万七千人の地方公共団体ができあがつたのでし
た。もつとも、私達の村は七ヶ町村のうち最も大き
かつたものですから矜恃もあつたでしょう。合併
が数年後れました。

やがて年月経て平成に変わる頃、私んところの娘
の中学校卒業時には小学校が二つに減り、生徒数も
激減したのです。

当時の小学校長さんから「このままだと来年から
複式学級になりそうで、何とかありませんかな」と
相談をうけたある父兄が、思はず「来年に間に合わ
んでしょうが帰つて家内に相談してみます」と答え
たそうな。

娘たちの卒業後二十数年たった今、旧村内に学校
は一つもありませんし合併した役場の管下にもかつ

ては中学七校もあつたものが一校のみ。謂うところの過疎なのですが、ここまでとは住民の誰も思っていないかつたのでした。

在所の高みに今も小学校と、その上手に中学校が見えます。何にも使っていない、完全な空き家。哀れを通りこしてなさけない。それでも季節には桜が咲き散るのですが。

坂のぼり詰めて廃校花盛り じょう



あをキーワード俳句辞典(くさくす)

鎖

ロザリオの鎖朽ち果て夏めく星
梅雨に入る犬の鎖の錆しづく
滝しぶき受けて鎖の岩を行く
鎖場を過ぎて風花尾根の道
大寒の鎖とぐるを巻いてゐる
鎖場にリュック下ろして罫雲

串

店先に串の岩魚を焼く匂ひ
痛々し目刺の串のささくれて

櫛

つげの櫛つられ買ひして良夜かな
秋の暮櫛目目細きやさ姿
櫛職人山霧の中戻りくる
餘寒なほ黄楊の小櫛の油滲み

串団子

竹内 弘子
大日向幸江
芝 尚子
吉弘 恭子
田中 藤穂
木村茂登子

名月や寺で饗さる串団子
紅葉深する籠に串団子

芝宮須磨子
森 理和

九尺二間

一人居の九尺二間の夜寒かな

芝宮須磨子

句集

句集なき達者幾たり白椿
句集編み卒寿とならむ春を待つ
遺句集をまた読返す夜の秋
店先に積まるる句集地虫鳴く
妻にとつて句集がらくた半夏生
句集手にぼんやりとする小春
冬萌や句集頂くあを十年
計らひの句集配らる秋の宴

櫛る

てのひらに櫛つたくてこんぺいとう
秋の風鼻を櫛る魚焼く香

堀内 一郎
赤座 典子
芝 尚子
堀内 一郎
赤座 典子
田中 藤穂

薬

夫逝きて残りし薬神無月
土用蛭薬なればと膳にのす

田中 藤穂
鎌倉喜久恵

点滴嫌や薬もいやと言ふ秋思
花八ツ手脳活性化する薬
犬の口開けて薬を初往診
掌の中に薬瓶鳴る土用の夜
胃薬を飲み満月を探しに行く
蒿高に薬を貰ひ冬うらら
手のひらの薬数へて寒の水
落した薬すぐに拾つて飲む夜寒
春の風邪五種の薬を振舞はる
飲み残す薬いろいろ夜の秋
胃薬は苦くなけれど桜餅
いつもの道いつもの薬いぬふぐり
手のひらの薬とりどり春憂ひ
花冷や薬ひとつを増やされし
ひと粒の薬に頼る青葉の夜
取落とす薬患方へはねてゆく
薬飲む秋冷の水のど通る
二人分薬仕分けり花辛夷
冬うらら朝の薬を飲み忘る

堀内 一郎
田中 藤穂
森 理和
渡邊 友七
田中 藤穂
森山のりこ
鎌倉喜久恵
篠田 純子
赤座 典子
芝 尚子
赤座 典子
芝 尚子
吉成美代子
鈴木多枝子
篠田 純子
篠田 純子
鎌倉喜久恵
山莊 慶子
田中 藤穂

秋彼岸

篠田純子

鷺二羽はねぢれの位置に秋彼岸

井戸ポンプの錆びは金色秋彼岸

雀が蛾を空中捕獲する努力

鼠坂で猫に遭ひけり涼新た

けふはビール旨いぞと云ふ日のビール

ゴミフェンスを結界にして水澄めり

もう聞けぬ戦の話秋彼岸

秋彼岸実家の寺は苦手です

茄子の色移る煮物のがんもどき



北海道 茂辺地

佐藤喜孝

晩秋のほかなにもなき驛に降り

綿蟲のひとつ泛きゐる茂辺地驛

綿蟲かと聲を掛くれば消えにけり

晩秋や袋を下げて道にゐる

話しゐる小豆畑を出ぬ人と

人の居たままの食卓むかご散る

藪のなか野菊に午後の日のこぼれ

未枯の野のはじまりの家の裏

晩秋てふ大いなる翳北の國

仕上げは風金色をなすねこじやし

聞けばあり干大根の裏に川

月刊 俳句界 2014年12月号

毎月25日発売 定価1000円(税込)

特集 第2弾

著名俳人俳号の謎

【物故俳人】
 ▼水原秋櫻子…水原春郎 星野椿
 ▼山口誓子…塩川雄三 柏原眠雨
 ▼日野草城…室生幸太郎 棚山波朗
 ▼鈴鹿野風呂…鈴鹿呂仁 安部元氣
 ▼種田山頭火…石 寒太 山尾玉藻
 ▼石田波郷…鈴木しげを 大高霧海
 ▼富澤赤黄男…今泉康弘 野ざらし延男
 ▼大野林火…関森勝夫 榎本鬼ヶ城
 ▼石原八束…佐怒賀正美 仲寒蟬
 ▼佐藤菫房…佐藤成之 涼野海音

【現代俳人】
 横澤放川

作品 榎本好宏 寺井谷子 山尾玉藻
 選は創作なりし選でわかる実力

《特集》 深見けん二 高橋悦男 加藤耕子
 白濱一羊 佐藤文字 大谷弘至

おまのエッセイ 志茂田景樹 間村俊一
 ※セクション結社「日矢」山崎房子

私の三冊 坊城俊樹「花鳥」

魅惑の俳人 林翔
 対談 佐高信の甘くて「ニ子ハ」
 三遊亭圓歌 (寄語家)

※一部変更の可能性あります。

株式会社 文學の森

お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2 田島ビル8F
 TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

あとがき

今年をあを吟行一度も実行してゐないことを知り驚く。だが牛にひかれて善光寺参りではないが、孫にひかれて公園や運動会に出かけて日を浴びてゐた。秋になりJRの四日間東北地方新幹線を

含めて乗り放題といふ切符をもとめた。盛岡から宮古までの山田線は車窓に流れる景色は飽きさせない。夏に行った時は木天蓼の白い葉が印象的であったが、この度は紅葉の寸前といふ佇まひに見惚れた。向いの席の人と賛嘆した。宮古で一泊、帰りは三陸鉄道で八戸に出やうと思つたが待ち時間が多すぎ諦めた。盛岡に着いたら新青森駅行が出るといふので座席指定券も整へず飛乗る。ひとり旅は気楽でよい。終点に着くころ、車窓に「三内丸山遺跡」といふ大きな看板が目に入った。下車して観光案内所で訪ねると近くにあるらしい。教へられたバスに乗り十分ほど白亜の県立美術館を左に見る。下車したくなる。そこを過ぎるともう目的地に着いた。縄文人に暫くなつて三内丸山遺跡で心の洗濯をしてきた。これからは努めて吟行をしゃうと思ひ直したところ。(喜孝)

二〇一四年十一月号

発行日 十一月五日
 発行所 東京都中野区中央2・50・3
 電話 090 9828 4244
 ファックス 03 3371 4623

印刷・製本・レイアウト 竹僊房
 カット／恩田秋夫・松村美智子
 表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年
 郵便振替 00130655526(あを発行所)
 乱丁・落丁お取替えます。